須田記念

視覚の現場

2021年2月　第4号

特集　パンデミックと美術

目次

第4号の発刊にあたって／原田平作 …… 2
表紙解説／熊田　司 …… 4

須田国太郎のことば

「画で立つまで」／須田国太郎 …… 5

須田国太郎論

須田国太郎――パンデミックからの出発／熊田　司 …… 11

口絵カラー図版（16頁） …… 17

特集　パンデミックと美術

特集「パンデミックと美術」について／熊田　司 …… 34
スペイン・インフルエンザと広瀬勝平／高柳有紀子 …… 35
没後101年目の偶感――関根正二と村山槐多／堀　宜雄 …… 39
疫病と聖母――バロック時代のイタリアを中心に／宮下規久朗 …… 43
1649年のペスト流行後の社会とセビーリャ画壇
――スルバランとムリーリョを中心に／坂本龍太 …… 47
スペインインフルエンザ／大戦（グレイト・ウォー）／美術
――〈忘れられた〉パンデミック再考／河本真理 …… 51
感染症と美術――その危機を乗り越えて／加藤義夫 …… 55
これから私たちが進むべき道／安來正博 …… 59
コロナ禍と横尾忠則現代美術館／山本淳夫 …… 63
コロナ禍の都市と写真――森山大道のスナップショットから／松實輝彦 …… 67
風の神送ろ！――疫病と疫神／佐藤守弘 …… 71

今言いたいこと

学芸員の独言――大規模展覧会を横目に見て／明尾圭造 …… 76
感染症に美術家はどう対処したか――新型コロナ禍を契機に／野地耕一郎 …… 80
雑誌『関西美術』について／平井章一 …… 83
戦後京都の染色芸術――来野月乙とタシスム／福本繁樹 …… 87
ミュージアムマネジメント雑感／安田篤生 …… 91

SUMMARY／各執筆者（川上幸子訳） …… 98
編集後記／熊田　司 …… 99
財団からのお知らせ …… 100

表紙解説・表

関根正二《自画像》

1918年（大正７）

油彩、カンヴァス　53.0×41.0㎝　福島県立美術館蔵

《信仰の悲しみ》《姉弟》とともに第５回二科展に出品され、樗牛賞に輝いた作品。当時の洋画界に若い世代の登場を印象づけたが、わずか９ヶ月後に関根はあっけなく命を奪われる。奪ったのは世界的パンデミックを引き起こした「スペイン風邪」インフルエンザである。しかしそれ以前から、蓄膿症手術や結核性の肋膜肺炎など健康不安に見舞われ、一時幻視を見るまでになったという関根が、空想の楽土を描く《信仰の悲しみ》（36頁参照）、甘美な幼時追想を絵画化した《姉弟》とともに《自画像》を出品したことには意味がある。夢の未来でも過去でもない、今の「ざらざらした」現実を絵姿にしたからである。19歳の大柄な画家は、思いのほか老成した印象でじっとこちらを見つめている。分厚く紅い唇、やや紅潮した頬がわずかに少年らしさを留めるばかりで、暗褐色の背景に沈むその姿からは制作を終えた心の静謐が感じられる。何度も構図を変更したのか、色んな筆触と色彩が透けて見える苦闘の痕跡が生々しく周囲を取り囲んでいる。（熊田　司）

表紙解説・裏

須田国太郎《トマールにて》

1920年（大正９）

鉛筆・コンテ、紙　49.0×64.0㎝　東京国立近代美術館蔵
（『須田国太郎展図録』1981、京都国立近代美術館・京都新聞社 より転載）

ポルトガルの古都トマールを須田が訪れたのは、マドリッドに落ち着いて半年後の1920年１月６日である。翌日、12世紀にテンプル騎士団によって創建された修道院を見学、「午前コンベントをみる　山の上の城の中なり　お伽噺に入る心地す」と日記に書いた。城壁と一体化した修道院の遠望を描くこの大判用紙の素描は、日記に「九日　午前十一時よりコンヴェントのうらより写生　行きすぎの人々我に挨拶す」と記す作品であろう。うねうねとくねる尾根筋道の左斜面はオリーブ畠であろうか、遠景には前日訪れた「ノッサセニョーラ」礼拝堂も見え、トマール到着時に感じた「気候春の如し」の陽気が、そのままこの風景素描にも満ちるかのようだ。ともすれば加筆に加筆を重ねて、重々しくなりがちな油彩風景に比べて、鉛筆やコンテの暢びやかな線描がみずみずしい。（熊田　司）